

氏名(本籍)	田村敏広(静岡県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4470号		
学位授与年月日	平成19年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Motivations for the Meanings and Functions of Constructions: With Special Reference to English Constructions with <i>Have</i> and <i>Get</i> (構文の意味機能の動機付けについて－動詞 <i>Have</i> と <i>Get</i> を用いた英語構文を中心に－)		
主査	筑波大学教授	博士(言語学)	加賀信広
副査	筑波大学教授	文学博士	廣瀬幸生
副査	筑波大学教授	文学博士	藤原保明
副査	筑波大学准教授	博士(言語学)	和田尚明
副査	筑波大学准教授	Dr. phil. (言語学)	森芳樹

論文の内容の要旨

構文文法は、様々な構文をそれぞれ独立しているひとつの単位とみなし、それらの構文が一定の意味ないし機能を担っていると考える。本論文は基本的にこの構文文法の考え方を踏襲するが、しかしながら、その構文と意味の関係を単に仮定するのではなく、その関係を深く掘り下げて考察し、けっして恣意的ではない関係がそこに存在する旨の主張を行うことが本論文の眼目となる。すなわち、構文と意味ないし機能の一定の関係を所与のものとするのではなく、構文がなぜ一定の意味ないし機能を担うことに至ったのかを深く追究することにより、いわば構文の意味的、機能的「動機付け」を明らかにすることを目標とする。そのような観点から、本論文では、英語の *have* と *get* を含む構文および日本語の「～てしまう」を含む構文を詳しく観察し、それらの構文の統語的、意味的、機能的特徴を整理して示すとともに、それらの構文がそれぞれ一定の動機付けを有していることを示す。

本論文は6章で構成される。

第1章では、本論文の目的と構成などが述べられる。

第2章は、使役と経験の解釈をもつ *have* 構文に焦点を当てる。たとえば *Mary had her hair cut short.* という文では、「メアリーが(誰かに)髪を短く切ってもらった」という使役の解釈と、「メアリーは(誰かに)髪を短く切られてしまった」という経験の解釈の2つが可能である。これまでの研究では、使役と経験といういわば対極を成す2つの解釈をもち得るのは、この構文に用いられる動詞 *have* が特定の意味をもたないため、主語と補部の関係は文脈次第で使役的にも経験的にも解釈され得るからであると分析されることが多かった。これに対して、本論文では、使役と経験の解釈が可能になるのは、この構文に現れる *have* 自体が二面性をもっているからであると主張する。つまり、単純な目的語をとった場合の *have* には、「所有している」や「ある」などの意味になる状態的な用法と「行う」や「過ごす」などの意味になる動作的な用法の2つがあるが、当該の構文に現れる *have* もこの語彙的二面性を引き継いでいると考えることができる。統語

的なテストを行った場合に、使役の解釈となる構文と経験の解釈となる構文が、動作的用法の have を含む他動詞構文と状態的な用法の have を含む他動詞構文にそれぞれ平行する振るまいをみせるという事実は、本論文の主張を裏付ける証拠となる。この意味で、使役・経験の have 構文は、動詞 have の語彙的性質によって動機付けられているとすることができる。

第3章では、イギリス英語の have got 表現の分析を行う。この have got を含む構文は、意味的には主語と目的語の間に所有関係が成立することを表す。一方、統語的には、疑問文や否定文において have が助動詞としての振るまいをみせるのに対して、付加疑問文や動詞句削除文においては have が本動詞として振るまいのため、do 挿入が必要になるという、一見したところ矛盾と思われる特性が観察される。歴史的にみれば、この have got の形式は、動詞 get の完了形から意味変化によって生じたものである。本論文では、動詞 get の完了形から所有を表す have got への意味変化の動機付けを探るとともに、その意味変化によって成立した have got の形式が、なぜ統語的に特殊な振るまいを示すに至ったのかについて考察する。「所有」を表し、意味的にひとつの構成要素とみるべき have got が統語的には2つの語から成っているという、意味と形式の間の不釣り合い (mismatch) がこの問題を解釈するための鍵になることを指摘する。

第4章では、get 受動文について考察する。この構文は、be 受動文の類似形式として、統語論点観点および意味論的観点から様々な分析が行われてきた。また、この構文が示す語用論的特徴として、話者による非難や後悔、予想外の驚きなどの感情表出を伴うことが多いことが指摘されてきた。本論文では、get 受動文がこのような感情表出の機能をもつのはなぜかという問題に取り組み、それに対する答えとして、動詞 get の意味的特性により、get 受動文は事態の変化とその結果状態に重きを置く構文であるため、この形式の受動文は話者の感情と結びつきやすいのであるという結論を得る。ただし、この感情表出は get 受動文に常に生ずるものではなく、あくまで語用論的な含意である。この点を説明するために、「好ましさ」と「予想外性」という2つのスケールが仮定され、この2つのスケール値が一定の条件を満たした場合に、get 受動文に感情表出の含意が生ずるという分析が提案される。

第5章では、日本語の「～てしまう」を含む構文を分析する。前章で論じた get 受動文と同様に、この構文においても「話者の感情を表出する」という語用論的機能が観察される。たとえば「大切な本をなくしてしまった」では話者の残念さや後悔といった感情を、「きれいだったて褒められちゃった」のような文では話者の喜びの感情を読み取ることができる。本論文では、このような語用論的機能は、「～てしまう」形式の意味的性質と語用論的環境の相互作用から生じるものであると主張する。この構文は「ある行為もしくは変化が実際に生じた」ことを強く意味するために、話者の事態に対する強い感情を表現しやすい形式であり、これが感情表出機能につながっていると考えられる。

第6章では、本論文の主張がまとめられる。

審査の結果の要旨

構文文法は、単語の意味を合成することにより文の意味を得ようとする語彙還元主義的な考え方に反対し、固有の意味が構文に貼りついているとの見方をとる。しかしながら、このような見方では、ある構文が一定の意味ないし機能を有している事実の所与のものとして単に仮定していることになり、その構文と意味ないし機能との関係を説明的に捉える視点が失われてしまう。一方、構文の意味を各単語の意味から機械的な計算により算出する語彙還元主義的な手法にも無理があることは明らかである。このような問題意識に基づき、けっして恣意的ではないが、しかしながら、必然的でもない構文とその意味ないし機能との関係を捉えうる概念として、本論文は「動機付け」という考え方を提案した。構文がもつ意味ないし機能は、構成要素である単語の意味から十全な形で予測することはできないが、その一定の意味ないし機能が成立することを促す

ような、なんらかの要因が存在しているはずである。本論文は、英語の have と get を含む構文について、日本語の「～てしまう」構文との比較も含めて、何がそのような要因になっているかを明らかにしようとした試みであるが、そのような事例研究を通して、構文と意味ないし機能の関係をダイナミックに捉えうる新たな手法を提示した点が、まず理論的な貢献として大いに評価される。

理論的な貢献に加え、個々の言語事実の分析にも随所に評価すべき点がみられる。使役と経験の解釈をうける have 構文がそれぞれ、動作的用法と状态的用法の have の他動詞文と統語的に平行する特徴をもつという事実の指摘は、have 構文の従来の研究にはなかった視点であり、今後の研究に大きな影響を与えうるデータを提供したと言える。また、have got 構文については、動作主性の弱化により get の「獲得」の意味が薄れ、その結果として「所有」を表す慣用句的表現が成立したとする分析を提示しているが、この分析は、当該構文の意味的特性だけでなく、同時にその統語的特性も説明の射程に入れることができるという点で優れている。すなわち、この構文では got に対応する意味成文が失われてしまったために、意味と形式との間に不釣り合いな状態が生まれており、それが一見したところ奇妙と思われる統語的振るまいを生み出す原因となっているとの分析であり、十分な説得力をもちうる説明であると思われる。

ただし、今後に残された課題がないわけではない。have 構文と have got 構文に関して、古い時代の英語に基づく通時的な議論を展開している部分があるが、通時的なデータについては調査および検討に不十分な面が見られる。また、get 受動文がもつ感情表出という語用論的含意を説明するために、「好ましき」と「予想外性」という2つのスケールが仮定されるが、get 受動文の含意とスケールの効果との関連性がいまひとつはっきりしていないという印象がある。さらに突き詰めて分析することが必要であると考えられる。

以上、若干の課題は残るものの、本論文は英語を中心とする構文研究に対して新しい視点と知見をもたらすものであり、優れた研究成果であることは間違いない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。